
 各地よりのたより

倉敷通信

それこそ十五年振りの大接近と云ふので、我々星好きの者のみでなく、巷間にも大きい興味と話題を投げかけた火星は、今や段々と遠ざかりつゝある。この珍客を迎へて全国の各地で種々と觀望會も催された事と思ふが、當天文臺でも八月19日に“講演と觀望會”が催された。山本博士の“我が國に於ける火星觀測の開拓者”といふ興味ある話題の講演を聴かんものと集まる聴衆百五六十名、實に堂にあふるゝの一大盛況であり、山本先生は“神戸に在住し、英國人を父に日本人を母とする併も立派な日本人たりしスコフィールド氏の天文學的業跡に就いて”熱辯をふるはれ、終つて原名誉臺長より、これ又言々句々熱ならざるはなしと云ふべき“戰時體制下における日本と天文學”といふ意義深い講演が三十分餘にわたつてなされた。それ等が終つて遠路わざわざ運んで下さつた水野主事の“天文に關する珍品”を見て後は例の32cmのカルバで火星觀望となり、熱心な觀望者は夜更けるまでアイピースにしがみつゝき、“極冠よ”“海よ”“運河よ”と眞摯の目をみはつた。

大阪からはわざわざ大口、山形の兩氏が來倉されたが、兩氏の意氣は物凄く“シーイングさえ良ければ夜明けまでやるんだが”と云つて居られた。しかし結局シーイング不良のためそれは止めて、後、山本先生を交へて水野、中村、大口、山形の諸氏と自分とを入れて山本先生持參のスコフィールド氏の觀測帳を見ながら天文學的雑話が午前一時頃まで續いた。良い日だつた。實に良い日だつた。誰の顔にも満足の色がたゞよつて、水野先生は“倉敷天文臺初まつて以來の大盛況だつた”と喜ばれ、自分もこの會がかゝる一大盛況に無事終つて、ほつと心の荷の下りるのを感じた。

今や涼風が吹いて天高く星は燦として輝く折にあたつて、この天文臺を訪ふ人は日夜斷へぬありさまであり、民衆天文臺の眞價はいよいよ發揮せられつゝあるが、研究的眞價の向上を自分はひそかに期してゐる。(岡林滋樹)

 堅田だより

★近江路は日照り續きの爲め、豐滿なのが自慢の麗湖も夏瘠せで、平常の全周234軒餘が減りも減つたり180軒弱、水位にして平均より1米餘の減水ぶり！此處近江八景の1つ“堅田の浮見堂”も「浮かぬ浮見堂」所か、カラヤ々に干上つて、眞下が子供等の自轉車遊歩道になり、青草に山羊が胃を膨して居る風景

となつて了つた。其後の各所の雨で 10cm 丈け増水したが、今尚ほ標準水位下 - 38cm であつて、皇軍の守備下にある揚子江の平均水位差 10cm 弱と比較すれば、差は7分の1位に過ぎない、20年振りと謂はれる大減水振りで、麗満の水が生命の糧の京阪方面に直接間接に大きい影響を與へて居る。

★事務所宛の郵便物は東洋紡堅田工場について多く、平均20通が届けられ、發送されて居る。會費も會員の約1割が納入遅れであるが、例年よりも良成績で悦ばしく、新入會員も各地より次々と與へられ、起時局下にも拘らず、ぐんぐん發展出来るのは感謝である。

コスモスや 征きたるひとの 反射鏡

(佐登兒)

島 田 よ り

拜啓、過日は拜訪、久しぶりにて御拜眉を得候のみならず、大勢にて御高話を拜聴するを得、難有御厚禮申上候。其後早速御挨拶も可申上候處、引續き雜事に紛れ失禮申上候。

廿四日より月末迄は火星觀望週間として始めて公開候處、曇雨の二日を除き連夜百名位宛の來會者有之、八月に入りても一二日は好晴の爲、特に觀望希望者有之、三日は例年の例にて基教會員の觀望會希望にて、之も好晴を幸、火星は勿論、木星、土星迄觀望仕候。其後兩三日商用にて他出候處、九日夜不在中當郡教育會の講習會に御來講中の工大竹内時男先生より御高間の御報有之、小生未だ一回も御拜眉も得居らず候に付、翌日は小生も右講習會へ出席、同夜先生の御來訪を得、種々御話伺ひ、翌日は又々他出、續いて當地方の盃蘭盆にて旁御禮も延引を重ね恐縮に有之(中略)、九月末か十月に入りて又々土星、木星を中心の觀望會公開可致さんかと存居候。拜具

八月十四日

清水眞一拜

瀬 戸 だ よ り

クルクル廻る風力計、左右に尾をふる風信器。瀬戸の秋は、北東の風が多い。風速は平均 1.0 位である。今頃はわけて風速はゆるい。秋月の瀬戸、瀬戸の秋、松茸の好季です。此の附近でも御多分に洩れず、十重二十重の嚴重なる縄張りです。しかし、此の縄張りの中にある吾々はどうでせうか?

瀬戸は山の村であり、池の里です。秋は山に松茸、池には鮒、秋は魚つりの好時節です。竹簍に入り、手ごろな竹を1本切る。一寸、右肩にかついで左手には今年竹で作つた新品のかご、「勝つて來るぞと勇ましく!」といつたやうな具合で、意氣揚々として、瀬戸池目ざして進む。おい目前に大なる池、これ

ぞ目的の池である。場所を選んで、やをら糸をたれる。水面飽くまで静か、池一つは秋の青空と、巻積雲が映つてゐる。人も来なければ樹のそよぐ音さへしない。ふと空を見上げると、鳶が一羽、大きく、高く、低く廻つてゐる。ちと水面に浮いたうきに目をおとす、どうでせう、うきはビクビク動いてゐる。尙もよく見てゐると、突然、水面のうきが水深く入つた、「この時」と思つて全身に力を入れて、ウンと、竿を引き上げる、と、どうでせう、ピカピカ、光る、大きな鮒であつた。おい、池の里よ！

観測露場に一人さみしく百葉箱が立つてゐる。南の遙か遠い四國の山が、ぼんやりと浮いてゐる。室内には、あい變らず風信器がインキをつけてゐる、屋上に雀が鳴いてゐる。

K先生の10種反射望遠鏡取付おはる。暗室の中に、H氏の、ハンザ引伸器すはる。暗室はすっかり整備しました。

瀬戸黄道光観測所 岡 本 生

臺 北 支 部 (臺北天體觀測同好會)

設 立 昭和十四年六月 8 日

會 長 臺灣氣象臺技師 窪川一雄氏

會員數 93名

會員別 内地人 81名 本島人 12名
男 66名 女 17名

備 考 昭和十四年五月 1 日臺灣日々新報社創立四十周年記念事業の一として市民に科學思想普及の目的を以て臺北市へ寄贈せる 10cm 屈折式赤道儀(時計運轉)を最も有効に活用すべく市當局より委囑を受け、吉村昌久氏の御盡力により臺北在住天文同好者により結成されたるもの。毎週火・金曜日を市民指導公開日に、水・土曜日を會員觀測日に當つる外、毎月 1 回會長に依り、或は知名の士を聘し通俗天文講演を行ふ。其の間市當局の依頼により學生に太陽觀測指導、其の他一般天體觀測により會員の觀測指導を行ひし人の總數 2500 名近く(七月末日)、其の他當地新聞社と提携して天文趣味普及に不斷の活躍を續け居り、設立後日尙淺きに拘らず成績睹るべきものあり。九月より會報發行の豫定。本會附屬文庫には本邦發行せる天文學關係單行本、雜誌類は殆どその全部を網羅蒐集し會員の自由閱覽に供しつゝあり。近く觀測班を設け、南方低緯度の優位置を利用して主として南方天體の觀測に活躍をなす豫定。御期待されたし。(中島精治誌す)